
Do you like dog?

tomato

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Do you like dogs?

【Nコード】

N5170Z

【作者名】

tomato

【あらすじ】

犬が好きだからといって獣人になるのは間違っていると思うんだ、死んで転生した青年が見た最初の生き物は獣人、どうやら俺も獣人らしい。

この小説にはTSものが含まれます、嫌いな人は戻るの推奨。

犬好きの始まり

貴様も同じ人類だったら分かるはずだ！

これこそがMOE！であると！

「はあはあ犬かわえー！」

雑誌を見る、犬が沢山！

幸福すぎる、最高だ！かわゆくてかわゆくてもう死んでもいい！

大学生の俺はアパートに住んでいるせいで犬は飼えないが将来絶対犬を飼うんだ、シベリアンハスキーとか超好きだ、この間なんてシベ見たさにシベリアまで行っちゃったぜ。

戯れていたらいきなり猟師が銃を向けてきてマジびびったのは記憶に新しいな。

あの耳がピクピク動くところ、わふわふ言う鳴き声全てが至福である。

「犬になら全てを捧げてもいい」

そう思っていた自分もありました。

突然部屋全体が大きく揺れたかと思うと物凄い破碎音と共に屋根からビルが突き破ってきました。

「ぬわーーーーー」

一瞬で目の前が真っ暗になり何が起こったか全くわかりません、で

もこれだけは言える。
犬の写真集は手放せなかった。

暗え・・・どこだここ、いやマジでどこ？

俺が自分の力で開かないぜ、どうすりゃいいんだ。
むしろ体も自分の力で動かん、マジで動かん。

仕方がない犬のことでも考えようか、可愛い犬可愛い、頭をぐしぐしすると手を舐めてきたり手に頭をこすりつけてくるのがもうたまらん、ペタ犬耳もいいがとんがってる犬耳も最高だ、撫で心地は家の中で飼ってる奴より外で飼ってる奴の方が好きだな、あのゴワゴワ感が最高だ、ただし短い毛に限る。

長い毛だったら手入れが大変そうだけどちっちゃい奴を家で飼って腹の上で載せて一緒に寝るんだ、ただし耳はペタっしてしてる奴に限る、あのペタっしてしてる耳がふわふわすんのをるのが至福なんだ。

おっと、つらつらと考えていたらいきなり明るくなったぞ、うおま

ぶし！

ぼんやりとした風景が徐々に明確になり最初に見たのは人間の色とは思えない桃色の長い髪をした女性、その人は半裸に近い状態で俺を見つめている。

おいおい、そんなに見つめるなよ、俺は犬以外に見つめられても嬉しくないんだぜ。

ん？この人の頭になんか見覚えのある物が付いている。

近づいてみようとするが動かない、手を動かすと小さな赤子の手見えた、え？マジで？

自分の意思と関係なく体が移動させられ、その人の近くにいく、まあここまでで大体わかったが、まじか！。

「エイン、立派な獣人になるのですよ？」

そうおっしゃる母（多分）は頭にすっかり獣耳をつけていた。

獣人ですかー、犬耳ついてたらいいなー、と現実逃避をする俺でした。

俺がこの世界に生まれ落ちてからまず知ったことはこの世界について。

この世界の名前はコンセード、獣人族と人族の住まう国、といっても獣人は滅多に人の前に現れない、なんでも昔獣人を奴隷にする風潮があつたかららしい。

奴隷解放的なことをした俺たちのご先祖様が山の奥や秘境に隠れ住むようになってから人と獣人が積極的に関わりあうことは少なくなつた。

だから今俺がいるところも深い森に囲まれている、俺の体感でも森の木は大きすぎると思ふんだ。

ワンピースってレベルじゃねーぞ。

まあ人族のなかに獣人族があまりいないだけで、獣人族の中には結構人族はいる。

あとは獣人とか魔物とかそういうのはいるけど魔法とかそういうのはなかった、残念だ、魔法っぽいのならあつたが。

後は・・・

「エインは私に似て可愛いわねえきつと将来は素敵な女の子に成長

するわね」

（ ; ; ）ブワッ こんなのってないやい！

数年が経ち俺も足を使えるようになった、まだ外の世界は窓越しからしか見れないが。

俺のこっちの世界での親父様は狩人らしくあの森に入っているんなものを収穫してくる。

「エインできたか？」

黒い髪に黒い犬耳、少し欠けてるのが痛々しいがこれがこっちの世界での俺の父親わしゃわしゃしたいでござる。

「ん……」

さきほど親父殿が聞いてきたのは教えてもらった薬の作り方、これが魔法もどきの一つで傷によく効く薬だ、すり鉢の中には親父殿が用意してくれた虫やら小さな果実をすりつぶしてきたオレンジ色の練り物がある。

「言われた手順で出来たようだな、えらいぞ」

大きくてゴツイ手が俺の頭をグシャグシャと撫でる、俺の頭にもある犬耳が右に左と倒れる。

「お前はほかの兄弟と違って頭がいいな」

ほかの兄弟、実は俺には七人の兄と姉がいる、ついでに俺とは6歳差程である。

「ん……」

首を小さく横に振る、するとまた頭を撫でられる、ああ気持ちいい、犬の気持ちってこんななんだろうつか。

「まあともかく、これで緊急時に必要な薬は全部教えたな、全く成長が早すぎるのもあれだな」

笑いながら俺の頭を撫でる親父殿、それはいいとして後ろに母上殿がおられますよ？

「あなた？エインにはそういうこと教えないって言ったでしょ？」
怖い、母上殿怖いです。

「いや、エインがどうしてもって言ってきたからな・・・」

「エイン？」 どうなの？

全力で首を横に振る、ここで横に振らなければ殺されると俺の全本能が伝えている。

「まったく、エインが表情を出しにくいから無理させて！」

「エル！痛い痛い耳痛い！ちぎれる！またちぎれちゃうから！」

あー、と断末魔のような声を上げながら連れて行かれる親父殿。

というかその耳ちぎれてるの母上殿のせいだったのかよ。

あ、そうだ転生した弊害かどうかは知らないけど感情が表情にあまり出ない上に声を出すのが苦手だ。

文字や言葉はわかるんだけどな。

犬の子供の数はすごい(前書き)

人物紹介回特に覚えなくてもいいです。

犬の子供の数はずい

今日は魔法もどきについて再度確認しようと思う。

魔法もどき、正確には精霊具？まあ名前はともかく、とにかくそれは簡単に面白かった、まあ俺は年齢不十分でやらせてもらえなかったが。

精霊語というものがあってそれを何かに書き込むことによって言葉が事実となるらしい。

例えば「火」と書いたら火がつくわけだが欠点は使ったら物にもよるけどすぐ壊れることくらいだな。

この字も親父殿に教えてもらったが難しくやってられん、取り敢えず狩りに必要なものだけ教えてもらった。

また親父殿は母上殿に連れて行かれたが。

考え込んでいると誰かが俺の肩を叩いてきた。

「エイン、外で遊ぼうぜー」

「ん・・・」

首肯して私の兄、三男のリースに付いて行く、彼は私たちの兄弟の中で一番鼻が効く、父譲りの黒い犬耳が途中で白くなっているのがチャームポイントの黒髪の少年だ。

「今日は何するー?」

「草原まで行こうぜー」

西の森の手前にある何も無い草原に行こうと言い出したのは長男のエン群れを統率するのが得意でよくいたずらを起こしては母上殿に叱られている。

藍色の髪の毛と犬耳は遠くからでもすぐに分かる、ついでにエンにはよく撫でられる。

「えーなんもねえじゃん」

面倒くさそうに頭を手にする次男のウォット、母方の爺様の色だったらしいゴールデンレトリバーに近い色の髪と犬耳。

優しく誰にでも手を差し伸べるかわいい奴ペタツとした犬耳が庇護欲をそそる。

「家で遊ぶのがいいわ」

メガネを押し上げて発言するのは長女のシス、頭はいいんだけど運動が不得意でよくリースにおんぶされてる。

紫色の髪と犬耳は最初どうかと思ったけどいいね！最高だよ！

「エインはどうしたい?」

次女のエヴァが私に意見を求めてくる、私と同じ桃色の髪と犬耳を持つ女の子で母上殿によく似ている。

兄たちは性格が似てなくてよかったと言っている、優しく気遣いの溢れる淑女だ。

いや母上殿に優しさや気遣いが無いわけではない。

「エンがいい……」

「草原だってー」

「ほら見る！エンは俺の味方だ！」

「えーしょうがないなー」

「またあそこかー」

「ん」

「お昼になったら帰ってくるのよー」

母上殿に見送られ草原に向かうことにしました、あ、シス姉さんがコケた。

「やっと着いたわね、あー疲れた」

シス姉さんがウォット兄さんの背中から起き上がる。
まさかあの程度でバテるとは。

「お前歩いてねえじゃん・・・」

ウォット兄さんが愚痴を言いながらもシス姉さんを背負っ、シンデレラ可愛いです。

「何するの??」

「そつだなーまた戦争ごっこしよつぜー」

「エイン強すぎるから嫌だー」

ついでに俺は皆の中で一番すばしっこくて気配を隠すのがうまい、親父殿も気づかない程だからな、奇襲にはもってこいってやつですよ。

「そつだそつだー」

「んーじゃあ木の実取り競争は？」

「リースの無双なんて見たくねー」

俺たち全員分でもリース兄さんに勝てなかったのはいい思い出です。

「木登り競争は？長老の木に登ろうよー」

「私木に登れない・・・」

それでいいのかシス姉さん・・・

「数字で勝負しましょう、私とエインはまだ勝敗がついてないわ」

「十以上数えられねー」

それでいいのかウオット兄さん・・・

「かくれんぼ・・・」

「「「「「却下」「」「」

ひでえ・・・

結局宝物探しになった、一番宝っぽいのを見つけたやつ勝ちだそう
うだ。

ルールは森の奥に行かないこと、魔物にあつたらすぐに逃げるこ
と、二人一組で動くこと。

組み分けはエン兄さんと俺、ウオット兄さんとシス姉さん、リース
兄さんとエヴァ姉さん。

そうして俺たちは森に入っていた、よしお宝見つけるぞー。

高い木々は見上げても尚高い、日差しが木漏れ日となって森を明る
くする。

「エイン、絶対に宝を見つけるぞ！負けたらお仕置きだからな！」

「ん……」

エン兄さん……負けたらお仕置きは酷いと思うぜ。

この間リリースにをバツゲームと称して水風呂に入れて怒られたのにまだ懲りないのかい。

「・・・」

魔物が現れないとは限らないので自作した竹の棒手裏剣を袖の内側に隠している、精霊語で強化したから強いよ、木に穴開けられるから。

あ、そうだついでに言つと書き込む精霊語の容量も物によって限られている、今持つてる竹の棒手裏剣だったら二つの意味が限界。

ついでに書き込んでいるのは「直進飛行」っていつのと「貫通強化」。

「エイン！これなんかどうかな？」

地面に転がっている赤色の石を指差す。

「小さい・・・」

「そうだよなあ〜なんか宝石でも落ちてないかな」

そんなホイホイ落ちてるわけでもないだろ。

そんなことを思っているとヒラヒラと極彩色の羽が落ちてきた、虹色に光っていてとても綺麗だ。

はて・・・どうしてこんなものがここに・・・

「　っ！」

それがどういう意味か理解したのと同じく翼が風を切り裂く音がして慌ててエン兄さんを押して倒した。

間一髪で倒れ込んだ瞬間に何かが俺たちの上を通り過ぎていった。

「な、極彩鳥！なんでこんなところに！？」

親父殿話を聞いていたからわかる、あれは極彩鳥、すごい速さで急降下して獲物を狙うんだっけ？

しかし大きい、大きさだけだったら俺の二倍はある。

「エイン、逃げよう」

「・・・」

背を向けようとするエン兄さんの背中を守るように竹の棒手裏剣を袖から抜き敵に対峙する。

「エイン、どうした？」

「じつじつ早い・・・」

くそ、肝心なところでも上手く言葉を出しにくい、面倒くさいなあ。

「ちっ、しょうがないか」

「笛・・・」

兄弟全員が持つている笛、これを使えば他の兄弟たちに緊急事態だということ伝える。

「分かった」

甲高い音が後方から鳴りそちらの方向を極彩鳥が見る。

「ふっ！」

その隙について左手に持っていた棒手裏剣を心臓に向けて投げる、親父殿に弱点は教えてもらったんだ。

「クエエエエ！」

翼で防がれるが「貫通強化」のおかげで翼を貫通する、ちっ、軌道がそれで心臓に刺さらなかった。

竹が精霊語に耐えられなくなり粉になる。

あと二本か・・・残りの自作棒手裏剣の数を確認する。

「クアアアア！」

「っ！」

飛んで突っ込んでくる、俺とエン兄さんは横に飛んでそれを逃れた。

「旋回して戻ってくるからそこをやってくれ、俺が誘導する」

「ん・・・」

自分のやる事が分かれればたとえ妹であっても指示をだす、そんな兄さんは俺の好みの兄さんだ、上から物を言わないのも高得点だな。

「来るぞ！」

手近にあった石を極彩鳥に投げつけ意識を惹きつけるエン兄さん。

「・・・」

まだ、まだだ・・・極彩鳥がエン兄さんの上に伸し掛ろうとした瞬間に棒手裏剣を投げる。

こんどの精霊語は「速度倍速」の二つ重ね。
軽い音と共に極彩鳥の頭が射抜かれる。

俺は手を振りかざしたまま安堵した、胸を狙うつもりだったのに頭に飛んでった・・・手が滑ったけどエン兄さんが無事でよかった！。

「エイン？大丈夫か？」

倒れた極彩鳥を放って俺の下に駆け寄るエン兄さん。
藍色の犬耳がへたれてるのが可愛いっすね。

「どっかしたの！？」

「どっかした！？」

笛の音を聞いて駆けつけたのかシス姉さんとウォット兄さんが走ってくる。

一旦草原に出て話をすることにした私たちは草原までなるべく静かに周りに注意を払いながら歩いてきた。

「それで魔物が襲ってきて、逃げ切れなかったから倒したんだけど、そういえばリースとエヴァは？」

「父さん呼びに行っただけ」

「最善だな」

「ああ、ところでその魔物はあそこに倒れてた綺麗な奴か？」

「ああ、死ぬかと思っただけ」

そこで俺が持っていた虹色の羽をシス姉さんに見せる。

「あら極彩鳥の羽じゃない、優勝はエインとエン兄さんチームに譲らないとね」

「まだゲームするつもりだったのかよ」

「シスは呑気だなあ」

このほんわかした雰囲気好きだわ〜まさに犬！って感じで。

「お前たち大丈夫か!!」

和んでいるともものすごい形相をした親父殿が走ってやってきた、遙か遠くにリース兄さんとエヴァ姉さんが見える。

「はい大丈夫・・・」

「このバカどもが!」

涙目で四人をいっぺんに抱きしめる親父殿、ちよ、苦しい死ぬ・・・。

「あれほど森には入るなと言っておいただろうが」

「でも父さんも入ってるじゃないか!」

「それとこれは別だ!死んだりしたらどうしようかと・・・」

その言葉でエン兄さんの尻尾が萎れる、可愛いっすマジ可愛いっす。

「父さんエインが居なかったら俺死んでたよ」

ぬわー!余計なことを!

「エインが?エイン本当か?」

「う・・・」

「怒らないから」

「うん・・・」

首を縦に振る、怒らない・・・よね？

「説教だな」

なぜに!？

犬耳可愛いだが人間、てめえはダメだ

あれから親父殿が俺を狩りに連れて行きます、いや、超楽しいですね。

こういうサバイバルみたいなのが好物なんですよ、親父殿から色々教えてもらいながら魔獣を狩る。

素晴らしい日々ですね、本物の犬がいないのはとても残念ですけど。

「いいなあエインちゃんは、狩りに連れて行ってもらえて」

「ん……」

首肯する、いや楽しいですしね。

「この毛皮もエインちゃんがつてきたんでしょ？」

「ん……」

再び首肯、そいつは猪みたいな魔獣の毛皮で殺しづらかった。

あ、今話してる子ですか？隣の家のエリちゃんです、柔らかいふわふわの茶色の髪の毛と犬耳がもう興奮しちゃいますね。

今日はエリちゃんに頼まれてエリちゃんの家泊まりなんですよ、女になって初めて役得だと思いましたね、匂いが最高ですよクンカクンカ。

「えへ、エインちゃんいい匂い」

スリスリとパジャマ姿で擦り寄ってくる幼女もといエリちゃんかわ
いいいいいいいいいい！！

マジ可愛いですよ、死にそうですよ、俺と同じショートにしたとき
に「えへへ、お揃いだね」って言われた時と同じぐらい死にそうで
すよ！

そうこうしているうちにエリちゃんが寝ちゃいました、頭をひとし
きり撫でた後自分について考えます。

この世界は一体何なんだろうか、元の世界には別にそこまで興味も
ないしどうでもいいんですが・・・

女・・・なんですよねえ俺、一人称は変えるべきなのだろうか、い
や俺ちよつと待て、体は変わっても心は変えないべきだろ。

でも一回だけ家族の前で俺と言ったら母上殿に説教されたんだよな
あ。

「びびりびびり・・・」

この口は誰かがいるときは喋らないくせに人が聴いてない時には普
通にしゃべるんですよねえ、まったく。

おや、エリちゃんがしがみついてきました、可愛いですねえ。

まあ、この問題はまた今度にしましょう。

エインちゃんっていう子がいるの、その子にとってはとっても可愛くて強くて、でもどこかモヤモヤするの、なんていうかすごく気になるの。

今日もお泊まり会で私が話していても少しだけ寂しそうな瞳が奥からチラチラと覗いてる。

それがとっても悲しくてついお父さんやお母さんにするよりに甘えてみたら寂しそうなのは消えました、嬉しくてもっと甘えてたらエインちゃんの体がとってもあたたかくてウトウトしてたの、そしたら。

「どっしりよっか・・・」

どこか別の何かを考えてる感じでエインちゃんがどこかへ行っただけみたいな感じがして、力いっぱいエインちゃんを抱きしめたら

驚いたふうに体を少し揺らしたあと、頭や耳を撫でてくれました。

エインちゃんは私と同じ年なのにいるんなことを知ってるの。

姉妹、兄弟のいない私に誰も知らないようなゲームを教えて一緒に遊んでくれます。

私エインちゃんが大好き、エインちゃんがどこかに行っちゃたらとっても悲しいの・・・

そんなことを考えてたら眠くなってきてエインちゃんに頭を撫でられながら私は安心して眠りに落ちました。

最近森の様子がおかしい、この辺に出没しない魔獣が現れている。

それに・・・

先ほど頭を射抜いたゴリラのような魔獣の背中を見ると裂傷があった、多分剣でできたものだろう。

「・・・」

血の匂いが森に蔓延している、エリちゃんや村の大人たちがこのところ怯えた感じなので何かがあったのだろう。

前世の知識から思うと、戦争があったのかもしれない、何にせよ魔獣が凶暴化しているのだ、気を付けなければ。

犬耳が伏せられてるのは色々可愛いですが、かわいそうです。

「・・・?」

人工物の匂いがしますな、なんとというか鉄くさい変な臭い、ちょっとだけ心が惹かれると言えばそうでもないような不思議な臭いが。

導かれるようにそこに行く人間がそこにいました、村にいる優しいような人間と違って武装をしていて超怖いです。

「怪我・・・」

頭や肩から血がだくだく出てます、超出てます。

このままだと出血多量で死ぬか、魔獣がこの人を食べちゃうかするでしょう。

助けるかどうか悩む、正直面倒だ・・・でも、まあ助けてあげるか。

「・・・・・・・・ん」

回答を得て首を振る、最近クセになりつつあるな・・・怖いんですね。

取り敢えず場所を移さないと、ひとまずこの人の武装を解除してつと。

「ぐっ・・・」

鎧を剥いでいたら痛そうな悲鳴を上げます、今助けますからねえ。

「君は・・・一体・・・」

朦朧としながら呟く青年は、チツ、イケメンかよ死ねよ、興が削がれたわ。

「静かに」

軽くなった男性を担いで・・・背が足りなくて男の頭が地面に落ちる、これだからノツポは・・・仕方がなくお姫様抱っこで担ぐ、ああキメエ、正面から男なんざ見たくねー、捨てちゃおうかな。

走りながら考える、どうするか・・・村に外の人間を入れるのは駄目だから俺の秘密基地に持つてくか、匂いつくの嫌だなあ。

この体になってから妙に鼻が効いて嫌だ、特にトイレとか最悪だよ。

しばらく経つと清流が見えてきた、村に流れる川の源流の一本だ。その傍に立つ一番大きな木の上に俺が秘密裏に建設した家がある。

男性を一度担ぎ直して、木の表面を引っ張ると簡単に取れて大きな洞が出てくる。

そこの中に梯子があつて登れるようになってるんですよ、外からバシないように作るのは大変だったぜ。

中には俺の戦利品の毛皮やら豚人の持ってた剣やら骨やらが置いてある。

羽毛布団が欲しくて極彩鳥を乱獲したことがあつて、虹色の布団のキモさがよくわかった。

取り敢えず藁に毛皮が敷いてある腰掛けソファもどきに男性を座らせる。

頭の傷は血こそたくさん出ているが大したことではない、肩の傷が問題かも、どうやら矢で射抜かれたらしく、穴があいている、貫通はしていない。

切り傷じゃなくてよかつたと言うか何と云うか。

「んー・・・・・・・・」

思考、何を使おうか・・・沢山作って種類も多いから全部試したいんだけどなあ。

木と毛皮で作った箱もどきから塗り薬のはいつた小さめのピンを取り出す。

あ、そうだ包帯も出さなきゃな、麻布を裂いて作った包帯も一緒に出した。

「よし・・・」

水瓶から水を少しだけ取り出し男の横に置く、布に染み込ませて傷口を軽く叩いていく、うはぁいいね、グロいのもいいね、犬もいいけどグロも好きだよ。

綺麗に拭いたあと傷口が開かないようにしてその上から薬を塗っていく。

苦悶の表情を浮かべる男性、もっと苦しむがいい、わははは。

丹念に塗りこんで布をしっかりと巻く、あんまり伸縮しないから加減が難しいけどどうにか失敗しないで出来た。

あの薬は傷によくて殺菌作用もあるらしい、傷は新しかったし無事を祈ろう、ダメだったら諦める、身ぐるみを剥いで捨てます。

俺様？いいえ我様です。（前書き）

分かる人には分かればいいんだけど、ギルちゃんほど我が儘ではありません。

俺様？いいえ我様です。

「あふ……」

おっと変な声が出てしまった、最近拾った人間のせいであんまり寝てないんだよね。

「大丈夫か？」

親父殿が心配してくれている、可愛いやつよ。

「ん……」

「そうか、今日も行くのか？」

「ん……」

あの人間の世話しないといけないから毎日森に行かねばならない、そろそろ奴も元気になるだろう。

誰にも人間のことは話していない、バレないように匂いも消してある。

今日はどの薬を試そうか……そういえば少し熱があったはず

ここはどこだ・・・？

目を覚ますと木でできた部屋、毛皮とその他雑多なものが置かれている。

誰かが手当をしてくれたのか肩と額に布が当てられている。喉が乾き周りを見渡すと水瓶がありその近くにコップが置いてあった。

「くくくくく・・・はあっ、不味い水だ」

当然といえば当然なのだが実はこの水この男の汗やら体を拭いた水であってけして飲むようではない。喉がうるおいやっとなんか現状が把握できてきた。

「木でできたというより、木そのものをくり抜いたのか？」

周りを見渡すと布切れや毛皮やら藁やら、見たこともない雑多な部屋だった。

「この部屋の主は一体どんな感性なのだ・・・」

足の踏み場もないじゃないか・・・汚らしい。

一応言っておくがこいつの寝相が悪いだけである。

「ぐっ・・・」

肩が痛む、今は休養を取るべきか・・・

先ほどまで寝かされていた場所に戻る、それにしてもこの部屋に窓はないのか・・・上を見上げると緑の葉から光がこもれる。

「おい、天井はないのか・・・やれやれ、家の主の顔を拝みたいものだ」

この男、文句しか言わないのである・・・

「くしゅんっ」

森に行こうとしたら寒気がしてくしゃみが出ってしまった。
後殺意も湧いた。

「エインちゃん大丈夫？」

「ん……」

エリちゃんは心配症だなあ、もしやあの男の風邪でも移ったか？
まあいいか、秘密基地の薬でも飲もう。

「いつてらしゃーい」

後ろ手に手を振る、俺カツコイイ！。

「寝てる……」

秘密基地に着くと男が寝ていた、ここで男の容姿について言うてお
こうか。

男は燃えるような赤い髪に瞳は……分からないが多分赤だろ。
がたいはでかく、親父殿といい勝負だ。

安らかに眠ってる顔がどうにもムカつくが仕方がない。

上の服を脱ぐ、サラシが巻いてあるので問題ない、寝てるし。

「薬……」

薬作ろう、熱に効くのはあの虫とあの木の实。
チエストに入っているいくつもの木の小瓶から目星の虫と木の实が
はいった小瓶を選ぶ。

棚の上に置いてある小鉢にその虫の死骸と木の实を混ぜ棒で磨り潰
す、そうしてから水を適量入れて混ぜる。

「・・・・・・・・」

禍々しいな・・・赤い斑点が浮く紫色の液体とは・・・。
ゴクリと喉が鳴る、恐ろしい液体だ、毒薬なのではないか？

食わせてみよう、話はそれからだろ。

どうするか・・・食事に混ぜて食べさせよう。

「ん・・・」

そうしよう、首を激しく縦に振る、あの男には犠牲になってもらお
う。

今日のご飯はお粥の形をした何かです。

昔兄弟で行った草原に群生していた謎の稲っぱい何か。
沼でもなんでも無い唯の平原にそのまま生えているなんておかしい
だろ。

誰もこれが食用だと知らなかったのかとってきた時に奇異の目を向
けられて大変だったぜ。

味も日本の品種改良品じゃなくて味が薄くて栄養がなさそうである。

部屋の真ん中に空いたおぼんぐらいの穴に敷き詰めた砂、つまりあ
れです、日本家屋のあれですよ。

乾いた木の枝を積み重ねて真ん中に木の皮の裏に削って書いた精霊
語を発動させ投げ落とす。

ああ、ついでに書いたのは「火」を表す精霊語。
すると直ぐにいい音と共に枝が燃えていく、ああ、ついでに木の皮
は砕け散る。

「う・・・・・・・・」

臭いなあ、鼻が良すぎるのも良くない・・・
火が絶えないように木の枝をたくさん入れる。
切り取った竹にはいったご飯を水多めで炊く。

しばし時間があるので何か思考しよう。

そういえばこの世界には人間による大国と獣人による大国があるら
しい。

国の名前は忘れた。

二つの国は対立しているらしく年中仲が悪いらしい。

この村の人は争いが嫌いな人間と獣人が一緒に移ってきて出来た隠れ里のようなものである。

だから皆は外の世界を嫌う、まあそりゃ好き好んで争いの種を持ち込みたくはないもんな。

拾った男をちらりと見る、戦争か・・・どこと戦争したんだろうか、やはり獣人達とだろうか。

竹の蓋に空いた穴から水蒸気が出てきた、ふむ、もういいだろう。

木のお椀に竹の中身を出す、うむ、上出来だ。

「・・・・・・・・うつ」

小鉢に入った例のアレを見る、き、気持ち悪い。

ちよつとだけ、ちよつとだけ気になって小指で触って舐める。

あ、甘い・・・この身に走った衝撃は計り知れなかった、なんという甘さだ、苺より甘いだろう？

こ、これをお粥に・・・？

そ、それは冒瀆だ、食に対する冒瀆だ、断じて認めぬこんな物！

「ぐ・・・・・・・・」

しかし健康の為だ、健康の・・・・・・・・入れるっ！ああああ・・・

「ひいつ・・・・・・・・」

これは、もう・・・何だ？

と、とにかくたべっ、食べさせないと。

男の眠ってる場所にお椀を持っていく。

ストーンと男の横に座り、匙でアレをよそっ、うわぁ匂いも酷い、寝てる男の顔も心無しかピクピクしている。

手が震える、と、止まれ俺の手っ

男の口に持っていくが唇の隙間に入れられない、鼻を摘む・・・1、2、3、4よっど。

「ぶーーーーー！！！」

「あゝあーーーーー！！！」

紫の液体が目に入る、焼け付くように痛い！痛いっていつか燃えてる！絶対燃えてるこれ！

絶叫した、初めてこんなに絶叫した・・・こんな声親にも聞かせたことない。

「貴様ぁ！何を我に食わせているか！殺す気か！」

「うゝゝっ！！！」

蹴りを放つ、起きてたなこいつ！

「うおっ！？危な！我を誰だと思っているか！」

知るか！

「……」

「ぎゃあっ！やめっ！いたっ！いたい！」

薄目で我を手当した奴を確認する。

『なっ、獣人が・・・我を？』

驚いで声を出しそうになったが押しとどめる、桃色の獣人の女は我が寝ているのを確認すると上の服を脱いだ。

『ほお・・・なかなか・・・』

巻いてあるサラシが若干膨らんでいる。

『くくっ、何のつもりかしらんが愚かな獣よ』

「うゝゝつ！！」

蹴りを放たれる、さっきまで寄りかかっていたソファもどきが陥没する。

「うおっ！？危な！我を誰だと思っているか！」

顔を怒りに燃やした獣人の女が紫の液体を顔から垂らしながら我を殴ってきた。

「うーー！！」

「ぎゃあっ！やめっ！いたっ！いだい！」

あ、だめ！死ぬ！死ぬかも！死んじゃう………

俺様？いいえ我様です。（後書き）

誤字脱字があれば作者まで連絡お願いします。

早く犬耳を触らせろ、でなければ死んでしまっ

取り敢えず落ち着こう・・・紫色の液体を顔で拭って男の服に詰る。

「おい貴様、何我の服に・・・すみませんでした」

「・・・ん」

分かればいいんだよ分かれば、取り敢えずメシをもう一度作らねば。粥でいいか。

先ほどと同じ工程を繰り返す、料理をしていると後ろから声がかかる。

「その、なんだ、お前が我を救ったのか？」

「ん・・・」

後ろを見ないまま首肯する、面白そうだったからな。

「ここには一人で住んでいるのか？」

「・・・・・・ん」

しばらく悩み首肯する、確かにここには一人で住んでいる、住んでいるという休憩所だが。

「他に仲間はいないのか？」

それは敵の戦力を探ろうとする質問のように聞こえたので黙ったままでいいか。

「……………」

「いや、気に触ったのなら何も言わなくていい……すまなかったな」

どうやらそういうたぐいではないようだ、唯のお節介だろうか？

「はい……………」

出来た粥を木のお椀によそって手渡す、スプーンも渡す。

「あ、ああ」

俺は火で炙った干肉を焼いて齧る、魔物の肉ってのはやっぱり他と少し違うな、味が濃い。

肉を齧りながら男を観察する、スプーンで粥を掬いながら食べている、縁には決して口をつけない食べ方、上品すぎるその食べ方から貴族であると推測。

もちろん獣人にも貴族はいるらしい、親父殿はそいつらのことを話すときいつも眉を顰める。

「あなたは……………貴族？」

やっとのことで声を振り絞る、喉が痛い、もう喋りたくない。

「……我を凡百な貴族と一緒にするでない、我はアルベルト・リシュター・トルコネロ、帝国の第一皇子だ」

え、マジで、皇子様ですか、へー、ふーん。

「……そう」

「……それだけか？」

「……？」

首をかしげる、皇子の何がすごいのかよくわからん、ここでは皇子であることはさほど重要なことでもない。
精々すごいねーぐらいだ。

「いや、別に……そうか、なんでもない」

肩を落としたまま粥を食べるのを再開するアルベルなんちゃら、長
いから忘れた。

「エイン」

「ん？」

「名前……」

「ああ、お前の名か、エインだな、分かった」

「ん」

分かればいいんですよ、分かれば。

食事をして、薬を飲ませて包帯を変えてやるのがなくなったので武器と防具の手入れをする。

彫刻刀で矢に精霊語『貫通強化』を刻んでいく、作るだけ作ったら今度は刃が所々欠けたショートソードを磨いていく。

この剣は襲ってきた豚人を逆に殺してその時に手に入れたものである。

獣人とは動物と人との間の存在であるので豚やら猫やら犬やらいろんな種族がいる。

すべての種族が仲がいいというわけではない、なぜなら基本的に獣

人は自分の認めた相手にしか従わないらしい。

ショートソードを磨き終わり、今度は自作した籠手を一度分解し手覆いの裏に書かれている精霊語を効果が消えないうちに書き直す。

ここでまた少し説明をしよう、精霊語は一度使うと消えてしまう、だが消えない精霊語がある、それは魔物や私たちの血を使ってそれを刻んだときである。

その魔物の強さによってその精霊語の持続時間や強さが変わる。人間たちが獣人たちを支配したいのはそれもあるかもしれない。

全ての手入れが終わり帰る時間になったので全てを装備して帰るために梯子に足を掛ける。

「エイン！」

突然呼び止められる、いやむしろなに呼び捨てしてんだ、ファック。

「明日も来るのか？」

「ん」

いや、ここ俺の秘密基地だし、というか早くお前に出て行ってほしいんだけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5170z/>

Do you like dog?

2011年12月27日00時51分発行